
「ツラ」をかぶった絶世美人

神酒 羽乃魅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ツラ」をかぶった絶世美人

【Nコード】

N2495BA

【作者名】

神酒 羽乃魅

【あらすじ】

学校で絶世の美人とされている「おつなすな」弧桜齋は男子にも女子にも持てる上に成績優秀、運動神経も抜群、何もかもできる完璧な人だった。中でも髪の毛が特にきれいで皆があこがれていた。しかしある日、リンスの横においてあった脱毛剤を………！

絶世美人の日常

カツカツと中学校の校門に靴の音が響く。

この学校一の美人とされている私、「あつなすな」弧桜齋は
毎朝これから起こるような出来事に頭を悩ましている。

校門に入ると大量の男子が私を待ち構えて、もじもじしている。

「きょうも齋さんの髪はうつくしくな〜」

一人の男子が私を見ていう。

何もじもじしてんだ！美しいといわれて嬉しくないわけじゃない
けど

そんな風にいわれたら嫌だよ！

「コラ！ばか！美しいのは齋さん全体だろ！」

どっちも馬鹿！一緒だつーの！何怒ってんだ！！

「そういや、俺、このまえナズナさんの髪の毛一本拾ったぜ！
財布の中に入れてあった！」

うそ！まで！さすがにそれは引くよ！？ドンびくよ？

私が心の中でそう思っただけでも勝手に男子どもの会話は続く。

「あ！俺も俺も！それでさ俺、その髪の毛一本ネットオークション

ンで売ったら

「1円にもならなかった!」

え!ええー!!って馬鹿かてめえら!

そんなの売れるわけないじゃん!

見ず知らずの女の髪なんか!

朝から驚き・・・ドン引きが連発する。

すこしほつと一息つき、靴箱で靴を履き替える。

しかしここにも面倒なことが・・・。

靴箱を開けると大量のピンクの封筒・・・ラブレターが落ちてくる。

私はにつこりと満面の笑みを浮かべ、その髪をかばんに突っ込む。

これまたいつものように私の友達っていうかライバルっていうか、敵っていうか・・・。

私につっかかってくる奴、ならみや ちんぺい 榎宮樂鯉がやってくる。

「相変わらずキレイな髪ねえ?」

「なにか?」

「その紙くれれば私のほうが美人なのにねえ?」

ねえ?が多い。

「あーあー。もうチャイムなっちゃいますね樂鯉？
私はさっさと教室へいくことにします。」

めんどくさいのでドロンします。・・・つまり逃げます。

「またんかー！ー！！」

後ろから追いかけてくるけど全然追いつかない。

てかむしろ離されている。

別に樂利が遅いわけではない。

言っではなんだが、私が異常に速いのだ。

教室に入って友達と挨拶する。

けど
こついう美人が出てくる話って、たいてい美人の子いじめられる

私の場合はどうやら別らしい。

女子さえ私に見ほれているのが見て取れる。

ナルシストだと思いかもしれないが、事実なのだ。

しかしそんな中にも男子で唯一私に見向きもしない奴がいる。

彼の名は**琶島参駕**。
はしま さんが

なかなか顔はかつこいい。
の割りに性格は結構おっとりしているほうで、
私とは小学校の頃からの付き合いだ。

割と仲はいいのだが、向こうは私に恋心を抱かない。

こっちは……。私は……。小学校の頃からずっと……。

なのにどういう事??と、すこし思ってしまう。

でも私は彼が私の性格まで見てくれるので
彼がいるだけで幸せだ。

授業を終え、バスケット部に向かい、部活を終えて、友達と帰宅する。

家に帰り、門を開けて家の敷地を500Mほど歩いて玄関の戸を開ける。

私実は令嬢だったりする。

私の希望で普通の学校に入学させてもらった。

その後まずかばんからピンクの手紙の束を庭へもって行き、
焼却炉の扉を開け、放り込み、薪に火をつける。

手をパンパンとはらい満足げに風呂に入り髪を乾かす。

ん？ラブレター？読まなくていいのか？となるかもしれないが

あのラブレターには私の外見のことしかかかれてない。

あんなもの読んだって、気分が悪くなるだけだ。

なら読まずに、ラブレターを燃やせばいい

ラブレターが破れたーとかそんなことしないよ。

存在ごとなかったことにするんだ！

毎日あの量の手紙もらって破るって結構大変だし……。

もしも送り主から何か言われたときは

『へ？手紙？そんなの見てないけどな。探してみるね！』
と

『探したけど見つからなかった。』
で突き通す！

なんて便利な言葉だろう

まあ大体これが私の日常だ。

私が何においてもずば抜けて優秀なのがお分かりいただけましたか？？

まあその私があんなことになるなんて思ってもいなかったんですけどね……。

髪のも危機一髪！ていつか、もつOUT！

ある日のことだった。

別にいつもどおりの日常を過ごしていた私は家に帰り

いつもどおり手紙を燃やし、風呂に入る。

シャンプーを頭にのせて泡立て、

しっかり頭皮を洗い、シャワーで泡を洗い流す。

いつもは目にかからないように流しているのだが、
珍しく目にかかったうえに目に水が入ってしまった。

「いつてえ！！！」

基本タオルは風呂場に持ち込まない主義で
仕方なく手で目の辺りを軽くこする。

それでもまだ水は少し私の目の目の中に残っており、
仕方なく細目でリンスを探す。

「あ！あつた」

喜んで容器から液体を出し髪にのせる。

髪全体に広げ、水で洗い流す。

その後脱衣所に戻り、タオルを取り、顔を拭いて湯に浸かった。

そのとき私はまったく知らなかった。

リンスの隣にあった脱毛剤からわずかに液がたれ、ふたが開いていたことを。

つまり私が知らず知らずに使ったのはリンスではなく

脱毛剤だったのだ！

そうとも知らず私はにこやかに家族と食事を取りベッドに入り心地よく寝てしまった。

まあ今さら気づいても手遅れなんだが……。

すずめの声がする。さわやかな朝だ。

近頃は雨が多かったからこんな朝は久しぶりだ。

そう思っただけでベッドに座る。

そして枕元を見て考えを改めた。

……。こんな朝は初めてだと。

私が見たもの、それは大量の私の髪の毛だった。

もうこれホラーじゃねえの??ってくらいの。

叫びそうになったが、もしこれが誰かに知られたら……。

身震いした。

はっと気がついて、私の頭に一本でも髪が残っているか触って確認した。

つるつるだった。うん。きれいな髪の毛触るよりもつるつるだった。

私の中でいろいろ考えた結果、今日は部屋にこもりきり学校を休むことにした。

お母様をだますようで少し気が引けたけど、でも今はそれど頃じやない……。

てか、もう、誰か Help me!! (私を助けて~~~~~)
!~!)

助けて！かつら職人！！

はあ……。

それにしても困ったことになった……。

よりにもよってなんで脱毛剤を……。

髪の毛の抜けた原因を探るべく、私は家中を歩き回った。

今日はお父様は社長なので普通に仕事、お母様はバリバリのキャリーウーマン。

今日が水曜日だったことが不幸中の幸いだ。

昨日いった場所を考えに考えた結果、風呂場、リビング、庭、廊

下、自分の部屋

などが思い当たる。

「ええと……。確かシャンプーをした後、リンスを……。
!?」

脱毛剤の口が開いている！

私昨日使っていないのに！っでもしかして

細目でリンスを探したときに間違っ……！！

h n O !

そんな馬鹿な！

でもそれしか考えられない……。

まあそんなわけで今のよう脱毛剤が犯人とされている。

正確に言うと犯人は私なんだが……。

でもそんなうじうじしている訳にはいかない！

どうしよう……。

私がカツラつけてもきつとクラスの皆にはれるだろうし……。

ん？までよ……。

そっか、かつら！

KATURA!

カツラ最高！最高ではないが……。

私の髪の毛かつらにしてもらえばいいんだ！

ああ、何で今まで気づかなかったんだろう……。

現在午後3時、近くにカツラ屋さんがあるが閉店が確か7時ごろ。

作るの結構大変らしいけど、今からなら何とかなるかも！！

私はベッドから自分の抜けた髪の毛を握り、かばんの中に折りた

たむように収納した。

そしてニット帽を深くかぶり、自転車を全力でこぎまわった。

「はっはっはっ」

規則正しい呼吸とともに自転車は猛スピードで進む。

きいっと自転車のブレーキがかかる音が鳴り、私は店へ駆け込む。

「はあい。いらっしやい・・・。」

店の奥からおばあさんが出てくる。

この人が店番できっとおじいさんが職人なんだろう。

「あの・・・。わっ私職人の方にこの髪の毛でカツラ作って欲しいんですけど!」

かばんの中から自分の髪を引っ張り出し、頭を深々と下げながら差し出した。

「ふうー。うん、うん。なかなかきれいな髪だね?こつちも作り甲斐があるわい。」

ほっと一息。

「うんで、6万7千円になるがいいかえ?」

「ろっ6万7千!!」

「なんや、意外そうな顔しおつて。こゝんな長い髪、作る側は大変なやぞお？」

まあ仕方ない。これからの学校生活、こんなお金のせいで無駄にしたいくないもんね……。

「分かった。はいちようどぴったりのはずよ。」

おばあさんは数を数えてうんとうなずいた。

「ん〜。多分あさつてにはできるじゃろ。」

「ええ！それじゃあ遅いよ！私明日学校行かなきゃ行けないのにい〜。」

「ほう……。やっぱりお前の髪の毛じゃったか」

「あ！」

「そんなに早く仕上げた欲しいんなら、お前も手伝いな。」

背に腹は変えられない。

「わかった！私も手伝う！」

「電話はあっちじゃ。親に電話しときなさい。」

わたしは走って電話を取り、母の職場に電話をかける。

今日は徹夜になりそうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2495ba/>

「ヅラ」をかぶった絶世美人

2012年1月6日21時50分発行